

2018年スキーオリエンテーリング 世界学生選手権報告書

2018年2月21日～2月25日

Tartu, Estonia



スポーツ振興基金
独立行政法人日本スポーツ振興センター

目次

はじめに.....	1
1. 大会に向けての準備.....	3
2. 競技報告.....	10
3. エストニアの旅について.....	16
4. 競技結果（抜粋）.....	17
5. 地図.....	20
6. 大会風景.....	27
7. 会計報告.....	31
ご寄付して頂いた方々.....	32
おわりに.....	34

ごあいさつ

公益社団法人 日本オリエンテーリング協会
スキーオリエンテーリング委員会
委員長 柴田 達真

この度はエストニア、タルトゥで開催された第2回スキーオリエンテーリング学生選手権大会への参加にあたり、多大なるご支援・ご声援を頂戴いたしまして、誠にありがとうございます。

14か国、72名の参加となった今回の大会ですが、日本からは連続2回目の参加となり、男子4名、女子4名、監督1名の総勢9名で参加して参りました。エストニアは人口134万人ほどとそれほど大きな国ではありませんが、世界遺産にも指定されている首都タリン市街は目を見張る美しさで、また、Skypeや革新的な電子政府の運営など、ITの分野でも世界的に有名な国でもあります。

FISU（世界学生スポーツ連盟）が主催した今大会は、そうした環境の中で、スポーツを通じて健全な肉体を育むだけでなく、若い学生たちが同じルールの中で競い合い、讃え合い、交流を図り、お互いに研鑽していくことに大いなる意義があります。今回は、エストニアの地で、まさにその体現に成功した大会であったといえるでしょう。参加した大学生が、トレーニングの成果を発揮しただけではなく、視野を広げ、海外アスリートとの交流を育み、今後の人生において記憶に残る経験をしたのであれば、それに勝る喜びはありません。

来年はいよいよユニバーシアードがクラスノヤルスクで開催されます。スキーオリエンテーリングがユニバーシアードの競技種目として採用されるのはこれが初めてであり、日本からは、日本オリンピック委員会の指定の元、日本選手団が結成される予定です。日本のみならず、世界のスキーオリエンテーリングを盛り上げるために、皆様のより一層のご協力・ご支援・ご声援を頂戴できますと甚幸です。

最後になりましたが、今回の学生選手権への選手派遣にあたり、用具や金銭的支援、精神的なサポート等、その他の形で多大なるご支援を頂戴いたしました。改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

選手のみなさんとエストニアに行つて

オフィシャル 酒井佳子

スキーオリエンテーリングの世界では、ヨーロッパ、特に北欧勢が圧倒的に強いのですが、10年ほど前には、ヨーロッパ選手と互角に戦う日本人選手がいました。その当時のノウハウを少しでも現役選手たちに伝えられればと思い、今回、手弁当で同行させていただきました。

日本から本大会に参加した選手たちは、いずれもスキーオリエンテーリングを始めて2,3年と、他国の選手と比べても、経験が豊富とは言えません。しかし、日々の努力とともに、急速に力をつけてきており、近い将来、上位で戦う日本人選手が現れると私は確信しています。実際、今回の大会では、日本人選手が、ゴール前で他国の選手らとの競り合いを制するという、エキサイティングなシーンがありました。また、日本人選手がゴール後、他国の選手らと握手をして、互いの健闘をたたえ合っている姿を見ると、すでに彼らは、他国の選手らと、競技面においても、一人の人間としても、対等に渡り合える力を身に着けているように感じられました。

さて、現地エストニアに赴いた者として、日本チームが他国のオフィシャルや大会運営者に大変、親切にさせていただいたことを報告しなくてはなりません。このような方々の中には、日本で開催されたスキーオリエンテーリングの国際大会（1998年の長野・菅平、2009年の北海道・ルスツ）に参加し、その時に日本が好きになったという方もいました。20年も前の日本での思い出を、今も大切にしてくださっている方々がいるとは、なんとも不思議でありがたいことです。

最後に、チームをまとめ、オフィシャルの至らぬところを補ってくれたチームリーダーの渡邊志保さん、石原拓巳さん、ワックスの選択や指導をしてくれた石原湧樹さん、そのほか、選手のみなさんそれぞれが日本チームに貢献してくれたことに心から感謝を申し上げます。今後のご活躍を期待しています。

1. 大会に向けての準備

石原拓巳（岩手大学）

2017年世界選手権に出場した際、私は主な課題として上肢筋力不足（ダブルポールの弱さ）、読図スピードの遅さの二つを挙げ、意識してトレーニングした。

・上肢筋力

ローラースキーの際にダブルポールを多く取り入れるよう意識した。普段行っている筋トレ（体幹トレ、懸垂等）に加え、週に1度はウエイトトレーニングを行うようにした。

・読図スピード

自宅で地図を読む際、地図を凝視する時間をできる限り短くするなどして読図スピードを高めるよう心掛けた。シーズンインしてからは、監修の元、レースや練習会で他選手とともに様々な読図の練習をした。マップコンタクトを多くとり、素早くルートチョイスができるよう常に心掛けた。また、速さだけでなく、周りの人と議論することで、より多くの観点からルート検討することができるよう心掛けた。

<以上を振り返って>

上肢筋力については、レース中、特にナロートラックでのスピード差（ダブルポール）を感じた。

読図スピードについては、日本のレースでは昨年より成長が感ぜられていたが、本番では普段あまりしない緊張や他選手への意識が強く、思うような力が発揮できなかった。他選手を抜かすことを考えているとき等マップコンタクトの頻度が低くなりミスをした。大会後半は自信を失い何度も同じところを確認し、タイムを伸ばせなかった。常に迷いがあり、自信を持ったルート選択ができなかった。

読図のトレーニングは、冬に練習会などでやった練習を夏からローラースキーやランニングで更に積極的に行う必要がある。

スキー能力を向上させることで、滑りながらも地図が読みやすくなると感じた。海外レースでそれなりの結果を出すには、スキー能力が高くなければどうしようもない。クロスカントリースキー選手としての意識も持ってトレーニングする必要がある。

石原湧樹（東京大学）

昨年のクラスノヤルスク世界選手権でヨーロッパの大柄な選手とのダブルポールのパワーの差を感じたので、オフシーズンから上半身の筋トレを重点的に行った。最も力を入れたのは懸垂と腹筋であるが、これらによってダブルポールのパワーが上がるだけでなく滑りが崩れにくくなり、冬のクロカンレースなどで効果を実感することができた。

冬に入ってから、旧図から、ピステ道主体で激しいアップもなく、単純な走力が重要な

テレインだとわかったので、クロスカントリースキーの練習は通常通り行った。

以前からの課題である地図読みに関しては、フットのレースに参加して経験を積もうと考えていたが、スキーのトレーニングに時間をとられ、また秋以降膝の故障で走れなくなりすべてレースをキャンセルし、極めて不満足であった。

一方、週ごとにオフィシャルの酒井さんが出題してくださった海外地図の最速ルート探しクイズ、平地があればできるクロスOなどによって、スキーOのレースのないときにも地図読みトレーニングができたのは、ルートチョイスの考え方を身に着け、速い地図読みになれるという点で効果的であった。

昨年の大きな課題としてマップコンタクトがあったため、留寿都や安比でスキーOレースができるとき、日光で地図を見ながら滑れるときなどは、頻繁にマップコンタクトをとり常に周りのイメージと地図上のイメージを対応付けられるように意識した。しかしそのために必要以上にスピードを落としていることもあった。慎重さと追い込みのトレードオフは今後の課題としたい。

岸祥太郎（北海道大学）

夏場は、平日は大学構内を走ったりローラースキーをしたりした。去年のWSOCの準備ではロングを意識して長い距離を滑る練習をしたが、スピードを出す練習をしていなかったという反省があった。したがって今年は長い時間練習するよりも、短い距離をスピード出すようにした。また、朝に時間があれば腕立てなどの筋トレを行った（通年）。ただ、あまり朝が強い方ではないので多くの時間は割けなかった。また、これも通年だがski-o map memoryを毎日20レグやった。ルートを素早く探すという点では役立ったが、記憶するという点では実際のレース環境とは何かが違う気がするのであまり役立たないと思う。休日は、フットOの大会に参加したり北大OLCの練習会があれば参加したりした。また、去年までは電車などでテレインに向かっていたのだが、今年は自転車を使った。主に節約のためだったが、遅刻しないように急ぐことは良いトレーニングになった。

冬場は、平日は毎日走って通学して往復8km走った。主に節約のためであるが。また、スキー中に地図が読めない、記憶が不十分という課題があったので、マップホルダーを付けて階段ダッシュしたり、室内での地図の記憶練習を行ったりした。ただ、前者はスキー中の地図読みとは何かが違い、あまり役には立たなかったと思う。来年は他の事に時間を割こうと思う。休日はスキーをした。去年は一日合計50kmくらい滑ったが、今年は合計30kmくらいをスピード出して滑るようにした。また、マップホルダーを付けて地図を読みながら滑る練習もした。これは前述の階段ダッシュよりは実際に近い感覚が得られる。

レース直前の準備としては、自分がレース中に何をすべきかを頭の中で反芻していた。具体的には以下の事である。これらを完璧にできたわけではなかった。

- ・スタート前に北を確認→地図をしまったらすぐ正置→地図上のスタート位置とレグ線の全体像を把握→1,2のルート決定→最初の方の分岐を覚える

- ・地図を見ていない時は全力で滑る。
- ・地図のどこら辺を見ていたかを覚えておいて、地図読みが遅れるのを防ぐ。
- ・地図を見る時はなるべくスピードを落とさない。それで読めなかったらキックだけでスケータイングする。モービルトラックなら手を止めて素早く見る。
- ・ポストに着く前に次（とできればその次、またはその途中）のルートチョイスと脱出方向の確認が終わっている。

佐野響（筑波大学）

<シーズンオフ>

昨年4月末に開催された残雪合宿でトレーニング論について学び、トレーニング計画を立てるところから始めた。スキーに必要な筋力をあげることに、長時間滑り続けられる体力をつけること、クロスカンリースキーに近い動きとなるローラースキーの練習をすること、スキーOの地図に慣れ、運動しながらも素早くベストルートを選択できるようにすること、をシーズンインまでに取り組むトレーニングとし、一ヶ月毎にトレーニング計画を見直した。

フィジカル面については、月に20時間以上運動するという目標を立て、体幹トレや簡単な筋トレであったとしても毎日体を動かすことを意識して生活した。トレーニング内容を記録し、どれくらい目標を達成できているかを常に意識することができるようにした。他大学の強化選手や筑波大学オリエンテーリング部の部員と共にトレーニングを行い、また、トレーニング計画を見直すことでモチベーションが下がらないようにした。

ナビゲーション面については、スキーOに近い動きが多いと考えられるスプリント競技に多く参加することを心掛けた。毎週、国内外のスキーOの地図を見返すこと、合宿で教えていただいた地図読みトレーニングを実践することで海外の複雑なコースであったとしても、ベストルートを意識的に選ぶ練習を行った。

<シーズン>

初滑り合宿の直前から旭岳で初滑りを行い、できるだけ多く雪上で練習した。スキーOの合宿、大会に参加するだけでなく、直前までクロスカンリースキーの練習を多く行い、大会までに30日滑ることができた。基本的な滑り方から練習し、そのコースに適した滑り方を選び、速いスピードで滑れるよう練習を重ねた。スキーOの大会に出場したときは、ルートチョイスの無駄をなくすよう意識し、大会後は他の競技者とルート検証を行った。シーズン中もシーズンオフと同様のトレーニング、ナビゲーション練習は行い、実践的な雪上でのトレーニングと合わせて月30時間以上を目標とした。大会開催地であるHaanja近辺のOマップは毎週見直し、常設コースや、過去のレースの回しを確認した。

<以上を振り返って>

フィジカル面については目標を細かく決め、計画的に取り組むことができ、5月から大会までに200時間強のトレーニングを行った。しかし、試験前になるとトレーニングの時間が大きく減ってしまうなど、時期によってトレーニング量が変わってしまった点は改善点である。

クロスカントリースキーの練習は数をこなしたことで昨シーズンに比べできる滑り方が増え、スピードも上がった。しかし、昨年は運動量が突然増えたため、故障が目立ち、十分なトレーニングができていないこともあった。また、一度の体調不良が筋力の低下をもたらすことを実感したため、今後は体調管理にも気をつけて生活していきたい。

ナビゲーションについては、地図を読み込み、レース前に見直していても、実際にレースになるとモービル道の見落としやミスルートを選択をしてしまっており、実践的なトレーニングを多く積む必要があると感じた。クロスカントリースキー練習時にも簡単にできるクロスOは今後も行っていきたい。一方でスキー操作に精一杯だった昨シーズンに比べると、レース中に止まらずに地図読みをできる余裕ができたことは成長である。しかし現在地の把握と滑っているレグのルートを考えることに精一杯になってしまうため、先まで見越してプランを立てるよう意識していきたい。

塩平真士（北海道大学）

代表に選出されるまで自分が代表になることができるとは思っていなかったため、夏場に行くべきであった筋力トレーニングを代表に選出されてから始めた。特に普段フットをやっている私にとって腕を含む上半身の筋力が不足しているように感じたので、腕立て伏せなど腕周辺の筋力トレーニングを特に重点的に行った。

また、スキーの技術も他の代表選手に比べると劣っていたので、選出されてからの短い期間ではあるが、週末はクロスカントリーコースやスキーOの大会や講習会に積極的に行き、スキー技術の向上に努めた。また、平日夜に公園に行き指導を仰ぐこともあった。

その結果、特に上りに関してはかなりスピードが上がったように思う。下りに関してもある程度の坂であれば難なく曲がれるようにはなったが、モービルトラックのような細い道での急カーブや急坂に関しては最後まで転倒し続けた。

ただし、一日に走った距離は長くて30 km弱であったため、ほかの選手に比べればまだ練習不足であったかもしれないと後々思った。

地図読みに関してはフットである程度は培ったものがあると自分で思っていたが、スキーを練習し、(わずかではあるが)巡行のスピードが上がると、途端にルートを読み切れなくなってしまった。地図読みに対しては2月以降スキーで読図走をするなどして対策に励んだが、正直練習不足であったように後々感じた。

湯上麻貴（北海道大学）

まずはクロスカントリースキーの走法を身につけることが課題だったため、主にスケーティング技術の向上に時間を費やした。練習場所としては札幌市内の公園やクロスカントリーコースを利用することが多く、スキーO関係者や他の学生代表選手に指導していただいた。その結果、ピステ道におけるスケーティング技術には多少の改善が見られた。その一方で、

モービル道などの狭いトラックを滑る技術の向上や、フットと比較して速いスキーのスピードに合わせたナビゲーションの練習にはあまり時間を割けず、体力強化も不十分であった。そのため上りや下り、狭い道に入ると、滑ることに手一杯で同時に地図を読むことはほとんどできず、道の分岐を確認できずに立ち止まったり、下りの後の曲がりや分岐でミスをしたりが多かった。スキーO用の地図を読む練習は酒井さんが出してくださった問題を解いたり、大会に参加したりして練習した。狭い道の急斜面を滑ることが難しかったため、ルートチョイスはピステ道や平坦な道をできるだけ選択することを机上の地図読みでも心がけた。本番ではモービル道だけでなくピステ道が複雑に入り組んでおり、よりシンプルな地図読みが求められていたが、その意識は足りていなかった。しかし、自分の技量の範囲で滑りやすいルートを選択することはできた。パシュートやマススタートなどフットOとは異なるレースの形式に関しては、全日本大会などスキーOの大会を利用して練習した。マップの用意やマススタートについて事前に練習できたため本番ではさほど焦ることなくスタートできた。ただ、ロールの地図を自分で取ってマップホルダーに入れることは初めてだったのでやや手間取ってしまった。

大会中のベストレグは、パシュートの1→2→3だったと思う。ルートチョイスの幅が狭かったせいもあるが、シンプルなルートを詰まることなくたどれた。逆にあまり良くないと感じたレグは、同じくパシュートの11→12である。もっとシンプルで、アップも少ないルートを通ることができたうえ、道の分岐の前で立ち止まってしまった。今後はスキー技術、体力の向上と共に滑りながらの地図読み、シンプルなルートチョイスが課題である。

吉岡梨花子（北海道大学）

春から夏にかけては継続的なトレーニングができなかった。週3回以上トレーニングができた月もあれば、ほとんど何もしなかった月もあった。そのような状況であったため、合宿のようにまとまったトレーニングができる場を設けて頂けたのはとても有難かった。筋力強化やスキー技術の向上のために必要なトレーニング方法は、多くの先輩方が提示してくださっていたが、実際にはその半分も活かせなかったように思う。冬が近づくにつれて、それは自分にとってかなりネガティブに感じる要素だった。

初滑りは12月だった。12月はいいトレーニングができた。スキーが練習できる日は、片足に長く乗ることを目標に滑った。スキーができない日も、筋トレとポールウォークを行った。特に、酒井さんが計画して下さった年末合宿はとても有意義だった。とにかくダブルポールと片足スケーティングを反復し、今までより自信が持てるようになった。また、下りでスピードを落とさずに曲がることにも挑戦できるようになった。さらに、腕の力をうまくスケーティングに活かせていないこともわかり、収穫が多かった。

1月、2月はまとまった時間のある時に札幌に行ってスキーの練習をした。ミドルの距離が10kmと発表されていたため、15km程は滑れるようにしておく必要があった。そこで、午前中に16kmを一本、もしくは10kmを二本滑り、午後は片足スケーティングやダブルポール

を練習するようにした。年末合宿で見つかった課題も意識して練習した。直前のルスツでの実践練習や、裏磐梯の全日本スプリントは、レースの感覚を取り戻すのにとても良かった。

地図読みについては、机上でやるが多かった。酒井さんが毎週出題して下さっていた読図問題は、とても役に立った。ただ、私の一番の課題はとにかくスキーを滑れるようにすることだと考えていたため、スキーの練習をするときは、マップホルダーを付けないことが多かった。

<準備に対する評価>

夏場のトレーニングは言うまでもなく反省すべき点だ。体組成を測ると、明らかにトレーニングをした月は筋肉が増え、しなかった月は筋肉が減っていた。継続的なトレーニングは大切だ。

一方、冬場は今までで一番スキーを練習することができ、良かった。以前より速く移動できること、ミドルの距離を滑れることは自信になった。実際、ミドルのレースで、その成果が出せたのではないかと思う。ただし、上半身の筋力や心肺機能の強化が足りないことは、どのレースでもひしひしと感じた。

地図読みについてはもっと意欲的にやるべきだったと思う。パシュートやミドルの地図では現ロスすることはなかったが、スプリントではほとんど冷静な判断ができず、何度もリロケートすることになった。滑りながら読むことをもっとやっておくべきだった。

渡邊志保（静岡大学）

<大会にむけての準備>

これまでのスキーオリエンテーリングレースの課題として、ナロートラックでスピードを落ちてしまうことが挙げられた。この課題を克服するために、年末の合宿と日々の筋力トレーニングに力を入れた。年末の合宿は、本大会のオフィシャルである酒井さんに、ナロートラックを軽快にすべるためのダブルポールや片足スケータィング、下り方のテクニックなどをご指導いただいた。ワイドトラックでの滑り方が身に染み付いているため、コツがなかなか掴めず苦戦した。何度も繰り返し練習している中で、徐々にコツを掴むことができた。ナロートラックを軽快に滑るコツが分かってくると新たな課題がみえてきた。それは、ダブルポールや片足スケータィングに必要な上半身の筋力が不足していることであった。そこで、日々の隙間時間でできる上半身の筋力トレーニングを教えていただき、大会まで継続して行った。今までは、とにかく体力に任せがむしゃらに滑ってしまっていた。今回は、斜面やコース状況に合わせた滑り方ができるテクニックと筋力をつけることで、地図読みをする余裕がある効率のよい滑りを目指した。

<レースの振り返り>

初戦のスプリントでは、複雑なネットワークと早い海外選手に翻弄され、迅速な自己決定ができず、優柔不断なレースを繰り返してしまっただけで、なぜ、優柔不断を發揮してしまっただけか振り返ったところ、自分より他の選手のルートチョイスの方が信頼できると思っていた、

自分のルートチョイスでうまく行ったことがあまりなかったことが挙げられた。まとめると、レース中に自分で地図が読みきれておらず、自分のルートチョイスに自信がないことが課題となった。この課題を克服するために、他の選手が近くにいても、少々時間がかかっても、自分で地図を読み、迅速に自己決定をすることを以降のレースの目標とした。これにより以降のレースでは、スタートから1ポのミスはあったものの全体的には主体的に地図を読み、現ロスすることなく滑り切ることができた。また、一部のナロートラックでは、大会に向けて練習した成果を発揮することができた。一方で、地図読みに慎重になりすぎたあまりに全体的にスピード感がないレースをしてしまった。地図読みとスピードの双方の完成度を高めていくことが今後の課題である。

2. 競技報告

女子スプリント

スプリントは圧雪道 55%、モービル道 45%という日本で私が出場したことのあるレースでは考えられない比率の中で行われた。前日にスタート隔離エリアが発表され、日本から持って行った地図と照らし合わせてスタートからのコースについて代表選手と意見交換をしてから臨んだ。

レース直前はジョグをして体を温めてからスキー板に乗りウォーミングアップを行った。ウォーミングアップエリアは十分な広さがあり、滑りの最終確認だけでなく、しっかりと体を温めることができた。当日に固形のフッ素ワックスを塗り足し、レース直前には液体ワックスを塗ってレースに挑んだ。ワックスの調整は自分の判断ではまだできないが、雪に合ったワックスを選び、正しく使用することも速くなるためには必要不可欠な技術であると学んだ。また、隔離エリアまでバス移動だったためか、スタートまではあまり時間がなく慌ただしいスタートとなった。ウォーミングアップのルーティンを確立させ、何分前にどのような準備をすべきか事前に決めておきたい。

レース開始直前に驚かされたのは地図の大きさである。A4 サイズよりやや大きいとは聞いていたが 28 cm×34 cm という特大サイズであった。地図を落ち着いて折ることもできず、マップホルダーに入れる向きを間違え、ポストが多く存在する東側がマップホルダーからはみだした状態でスタートすることになってしまった。コースは前日のモデルイベントのトレインとほぼ同じような雪質でしっかりと固まっており、モービル道も滑りやすかった。

スタート直後のモービル道は想像よりも広いものが多く、落ち着いていればピステ道でないことを判断できたと思うが、焦りからか適切に判断できなかった。それに加えて道の分岐がとても多く、何度も立ち止まってしまった。道の多さに意識を取られ、正置と等高線を見てのルートチョイスで精一杯になってしまった。滑っている最中に植生と等高線を見て、現在地の確認をすることが翌日以降の課題となった。2 ポをすぎると他の海外選手に次々と抜かれながらも焦らずに地図を読み、ルートチョイスをすることができた。後半は大きなミスルートはなく、集中力を維持したままとても楽しくレースを終えることができた。また、レース中の海外選手の滑りを見て、地図読みの練習はもちろん必要であるが、スキー技術を向上させる必要があると強く感じた。

(文責 佐野響)

男子スプリント

競技エリア南のオープンが主に使われた。この部分はフィニッシュである会場から離れているため、A4では収まらないということで地図が規格外サイズだった。規格外サイズの場合、マップホルダーへの地図の入れ方によっては、重要な部分が入り切らずにヒラヒラと動いて見づらくなる可能性がある。しかし、初めての経験だったため、私やおそらく他のチームメイトもこのことの重要性を十分に認識していなかっただろう。何人かベストではない地図の入れ方をしてしまった。

コースは広いトラックが半分を占めていた。ただ、日本では狭いトラックととても広いトラックはよく見るが、広いトラックはなかなか見ないため、私や他のチームメイトは少し戸惑ってしまった。特に、スタート直後に広いトラックがあったが、「本当にこれで合っているのか」といきなり自信を失くしてしまった。

オープンエリアのネットワークは非常に密であるため、我々はどうも対応できなかった。酒井さんによると、こういう場合はトラックだけに頼るのではなく、フットOのように地形・植生の情報も参考にしておくべき道を意識した方が良いとのことだった。

以下では私個人の反省を述べる。まずはうまくいったことを述べたい。ルートを反射的に見つける力や素早くマップコンタクトする力は去年よりも向上していると思う。2,3のレッグでは気の迷いなくスムーズにポストに着くことが出来た。

次にミスや課題を述べる。地図の入れ方、広いトラックへの対応、密なネットワークへの対応は上に述べたが、それ以外を以下に列挙する。

- ・地図を読んでいない時でも何となく不安で全力で滑れなかった気がする。最初でつまづいた影響が大きい。しかし、気を立て直して修正するべき。
- ・4, 7, 9のレッグではトップラップのルートとは違った。それだけで数十秒のロスになっていると思われる。また、4のルートチョイスでは左右どちらに行くかを決断するまでの時間が長かった。迷うくらいなら思い切るべきだった。7, 9のルートチョイスでは、先読みの余裕が無かったため、トップのルートが思いついてもいなかった。
- ・何度か地図を読んでいるうちに分岐を通り過ぎてしまった。事前に覚えるだとか、素早くマップコンタクトをする必要がある。

(文責 岸祥太郎)

スプリントリレー (男子パート)

競技2日目のスプリントリレーは、女子1, 3, 5走(1.3~1.4km)、男子2, 4, 6走(1.4~1.6km)、マススタートで行われた。私は渡邊さんと組んでJapan-1チームとして出場した。

スタート・ゴールは会場のバイアスロンセンターで、チェンジオーバーは会場に戻ってきて180°ターンをしてから行われ、チェンジオーバー直後に地図置き場があった。圧雪比率は

ピステン:モービル =55:45 で、前日のスプリントと同様であった。しかし競技エリアは、会場周辺の常設クロカンコースを主として、ところどころ池やオープンエリアにモービルによる細かいネットワークが踏まれている程度で、簡単であった。前日の反省を活かしてオープンと林の境にも注目するようにし、スプリントの前半のように現在地の把握に難儀するようなことはなかった。

3回ともほぼ同じ回しだったため、反省をして次のラップに臨むことができた。例えば、私は1回目の細かいネットワークで頻繁のマップコンタクトを意識して滑ったが、慎重になってスピードが遅くなり、さらにはおそらく分岐を見落としてしまった。そこで、細かいネットワークは脱出するまで5ターン程度で済んでしまうので、2回目では曲がる方向を事前に暗記してからネットワークに入った。しかし結局、途中で覚え違いをしたのかまたミスしてしまい、3回目もあまりうまくいかなかった。細かいネットワークでスピードを上げる工夫が今後の課題となった。

私は3回目で、地図に集中してモービル道を下っているときに、足を取られて前に転倒し、木村さんからいただいた素晴らしいコンパスの天板を陥没させてしまった。その後少しの焦りから、ピステ道からモービル道に入るところでスピードを出しすぎて再び転倒する、闇雲に脱出してしまいコンパスもなくしばらく止まる、などの失敗を重ね、競っていたリトアニアチームに差をつけられてしまったことが悔しく感じられる。

日本の2チームは最下位付近でレースをしていたため、会場アナウンスも役員もあたたかく応援してくれた。早くこのような状況を脱してヨーロッパと競えるように、敵視されるようになりたいと感じた。

(文責 石原湧樹)

スプリントリレー (女子パート)

日本チームは、渡邊志保・石原湧樹チーム、佐野響・石原拓巳チームの2チームが出場した。女子が1,3,5走、男子が2,4,6走と3本ずつ走り、男子がフィニッシュを飾る。コースは、3本とも同じような場所を通るので、回数を重ねるほどに良くも悪くも慣れていった。コースの性質は、ピステ道とモービル道がはっきりと分かり、ネットワークもそれほど複雑ではなかった。ピステ道も多く活用出来たので、スピード感のあるレースとなった。

渡邊志保・石原湧樹チームの目標は、リトアニアに勝つことであった。1走目の私は、リトアニアの女子選手に遅れをとった状態で湧樹選手に引き継いだ。2走目の湧樹選手は、リトアニアの選手を追い抜いた状態で私に引き継いだ。3走目の私は、湧樹選手の燃えたぎる熱気の後押しされてスタートしたものの、マップの装着に手こずる間にリトアニアの女子選手に華麗に抜かれた。そのことで少し焦ったが、平常心を保つよう言い聞かせて湧樹選手に引き継いだ。4走目の湧樹選手は、リトアニアの男子選手を抜き、差を付け帰ってきた。5走目の私はリトアニアチームに勝っている嬉しさとプレッシャーの中、1ポに向かう途中少々ミスをしてしまった。リトアニアチームから遅れをとり、湧樹選手に引き継いだ。6走目の湧樹選手

は、コンパスを盛大に破壊しながらも、最後まで迫力のある滑りでゴールを切った。結果は残念ながらリトアニアチームに負けてしまったが、白熱したバトルを繰り広げることができた。私は、随分と足を引っ張ってしまった。そんな中、遅れをカバーし一緒に戦ってくれた湧樹選手には非常に感謝している。

佐野響・石原拓巳チームの響選手は、学生世界選手権に初参戦ながらもスプリントリレーに選抜され、一昨年からクロカンを始めたとは思えない滑りを見せてくれた。これまでの練習の成果を感じさせてくれるレースであった。拓巳選手は、立禁エリアに近づくなど危ない側面を見せつつも、最後まで力強い滑りで大健闘していた。応援スタンドから日本選手団が、たくさん声援を送ってくれた。おかげで元気に楽しんで滑ることができた。ご声援ありがとうございました。

(文責 渡邊志保)

男子パシュート

初日のスプリントでは、スタート前にバタバタしてしまっただけで完全に浮足立った状態で出走してしまい、凄惨な結果になってしまった。そのためパシュートではスタート前の準備を早めに終わらせて、落ち着いた状態でスタートしようと考えていた(当然のことではあるが)。それが功を奏したのかは分からないが、一枚目の地図(全部で三枚)では特にミスをすることなく落ち着いたレース運びができた。

しかしマップ交換をした直後整置を怠り、「よくわからないので前の選手にとりあえずついて行こう」などと安易に考えていると、案の定西に進まなければならなかったのに南にかなり進んでしまっていて、非常に大きなタイムロスになってしまった。その後はルートのミスはほぼなかったものの、ミスの影響からか体力が切れ始め、特にナロートラックでの片足スケータリングやダブルポールの速度が遅くなってしまっていたように感じた。

三枚目の地図のコースを走るときにはかなり体力を使い切っており、体力の無さ(というよりはスキー技術の稚拙さによる無駄な体力の消費)を痛感した。また体力が切れるとともに集中力も切れ始めており、12→13で、レグの間にある15番ポスト(通るとかなり距離は伸びてしまう)に行ってしまった。

スプリントやミドルとは違って、パシュートでは終盤に自分と競る選手がいた。そのため、体力はほぼなかったものの、最後までなんとか諦めずにくらいついて行こうという気持ちは3レースの中では最もあったように思う。なおその競っていた選手はクラシカルスの板を履いていた。

結果としては(マップアウトした選手などいたため)3レースのうち唯一最下位にならなかったレースであった。ただしレース内容としては、ルートチョイス的にもスキー技術的にも翌日のミドルのほうが満足できる内容であったように思う。

(文責 塩平真士)

女子パシュート

パシュートの日もスプリントやリレーの日と大差ない気温であったが、スプリントと比べて森の中を走ることが多かったため、寒く感じられた（寒さの原因には日陰にあるプレスタートで長く待機していたこともあっただろう）。雪面の温度も日の当たる場所と日陰で異なっていたようで日向の方がスキーの滑りが良いと感じた。

スタートは初日のスプリントレースの結果をもとにしたチェイシングスタートであった。私は優勝者のタイムより 10 分以上遅くゴールしていたため 30 秒ごとのタイムスタートとなった。実走 7.2 km、リレーで使用した範囲よりも西側の森の中で 2 回の地図交換を行う 3 マップのコースだった。最初の地図で森の奥まで行き、次の地図で森の中を一周、最後の地図で会場に戻ってきた。マップはロールしてあるものを取る形式で、マップ交換の際少し手間取った。

1 枚目の地図ではスタート→1 のレグ以外はルートチョイスのミスはなく、分岐の曲がりもミスはしなかった。2 枚目の地図はネットワークをうまく辿ることができず、分岐で立ち止まる場面が多かった。3 枚目の地図は 11 からの脱出はうまくいったが、12 へのルート選択はミスルートだった。13 まではメモリーがあったためすんなりと滑ることができた。全体的にピステ道よりはモービル道を使っている時間が長かったため、スケータリングができず、また細かいネットワークの地図読みも間に合わなかったこともあり、体が冷えてしまった。普段ならダブルポールで上るところを板を脱いで走る場面もあった。滑りながら地図を読む練習や、地図読みの負担を減らす練習が足りていないことを実感したレースであった。

(文責 湯上麻貴)

男子ミドル

マススタート方式で行われ、地図は 2 枚だった。使用された競技エリアは予想していた通りだった。ネットワークはパシュート同様粗くて難しくなく、スキースピードが問われるものだったが、各レグで複数のルートが考えられた。2 枚とも同じようなまわしだったので、1 枚目の経験を生かして 2 枚目のルート選択に生かすことができた。1 枚目も 2 枚目も完全に同じ地図を使う人は少なく、スキーが得意な人がオリエンティアとしてのプライドを捨てて金魚の糞になることができない仕組みが徹底されていた。

マススタートということで、特に私は前から 2 列目という好位置だったので、その有利な位置をキープするには、スタート 15 秒前からスタートまでにしっかり地図を読み 1 コントロールまで上位で進むことが不可欠だと考えた。15 秒でルート選択完了し、スタートフラッグは 5、6 位くらいで通過できたが、計画とは異なるピステ道に突っ込んでしまい、すぐに下位に収まってしまった。その後 1 か所長い間現在地ロスト、転倒して強打する等、良い部分なくゴールした。非常に不甲斐ないが、これが今の実力である。

凍った湖の上を利用したショートカットが印象的だった。多くの人が利用してみたいだが私はそれに気づくことができず、私は地図上の道と目の前の道しか見ていないことが改めてわかった。レースという緊張状態においても常にあらゆる観点から最速ルートを検討できることが、海外大会で良い結果を残すのに必要だと改めて実感した。

(文責 石原拓巳)

女子ミドル

コース距離は 8.5 km、2 マップでポスト数は 15、優勝設定は 40 分であった。当日は、スタートが午前 10 時だったため、朝からバタバタしていた。玄関で酒井さんに送り出してもらい、いつもより 30 分早くバスに乗り、会場へ向かった。天候は晴れ、気温は信用ならない現地の温度計で氷点下 5 度だったが、私は氷点下 10 度くらいに感じた。

スタートはマススタートで、男子が 10 時、女子は 10 時 10 分だった。冷え込みが激しいので、スタートレーンには中々入らない選手が多かった。私は 5 分前に入った。前後左右に海外選手がいたのでかなり緊張していたが、集団の中で一瞬バランスを崩したものの、ポールを折ったり転倒したりすることなくスタートすることができた。私以外の日本選手も無事にスタートできたようだったが、スキー板が片足とれているエストニアの選手を一人見かけた。

このレースで、私は大きなミスをすることがなかった。最もミスをしやすい、スタートから 1 番ポストまでは、無難に大きなピステ道を使い、冷静に分岐を確認しながら行った。その後も細かいミスはあったが、ルートチョイスを迷ったらピステ道の多い方を選んで行くようにし、堅実に地図を読んで行けたと思う。

ただし、結果的にこれはあまり良い考え方ではなかった。地図上のピステ道はとても広く、圧接もしっかりされているが、アップダウンが多かった。一方、モービル道は滑りやすいところと、雪がシャーベットのように滑りにくいところがあったが、アップダウンがない分、そちらを選んだ方が速そうなレッグがいくつかあった。さらに、ピステ道の方がモービル道よりも分岐が多く、地図読みの量が増えるというデメリットもあった。これらのことは、私はレース中に気付かなかったことだ。

なぜ気付かなかったか考えてみたが、基本的にモービル道をダブルポールで進むより、ピステ道を滑った方が速いというのが頭にあり、等高線をきちんと読んでいなかったのが原因だ。また、今までのレース中、私は男子選手に追い抜かれることが多かった。特に、モービル道で男子選手の一団とすれ違うのはかなりスリリングで、ほとんど止まって待つしかなかった。このような心理的要因も、私にモービル道を嫌わせた一因かもしれない。

レースの結果は、84 分であった。優勝者の約二倍と考えると悲しくなるが、約 12 km を 7 分/km で滑ったと考えると、妥当な結果であったと思う。ゴール付近では多くの外国人が温かい応援をくれた。ルートチョイスにミスがあったものの、自分の考えたルートを落ち着いて実行できた楽しいレースだった。

(文責 吉岡梨花子)

3. エストニアの旅について

空路は FINNAIR で成田~ Helsinki (Finland) ~ Tallinn (Estonia) だった。Helsinki ~ Tallinn は小さいプロペラ機だった。往路では荷物が乗り切らなかったようで、そのアナウンスが流れると落胆した人々がカウンターに向かっていった。私たちも例外ではなく、数人分のスキーケースが届かなかった（それ以外は全て来た）。後で大会ボランティアの人が空港に取りに行っ
て下さり、翌 13 時にはホテルに残りのスキーケースが届いた。このことだけではなく、大会ボランティアの方々には様々な場面でお世話になった。復路ではこのようなことは起きなかった。

空港から 180 km 離れたところに、宿舎がある Tartu は位置する。運営側が用意したバスに乗り、2 時間半かかった。宿舎は Hotel Tartu というそのままの名前の場所だった。何とワックスルームが用意されていて（地下の物置場のような場所）、非常に便利だった。ワックスルームを用意してくれたホテルに感謝したい。

20 日にはモデイベがあり、いよいよ大会が始まった。競技会場となる Haanja バイアスロンスタジアムは宿舎から南に 90 km 離れたところにあり、バスで 1 時間ちょっとかかった。待機所ではワクシングが出来たが、テーブルが無かった。他の国は当然の用にテーブルを組み立て始めたが、私たちは辺りに転がっていたはしご状(?)のものにバイスを付けた。ここではレース後にベースを塗るだけで、後の作業はホテルで行ったので、特に困ったことは無かった。

ここで、会場付近やエストニアの地形や天気などについて書いておこう。バス移動の最中に外を眺めていたが、ほとんど平らである。トレインもそうであり、登り下りで苦勞することはなかった。トレインの林はそこそこの密度がある。したがって、ドット道は数個あるものの、オープン以外ではショートカット跡は無かったと記憶している。例年は日中 0℃くらいらしいのだが、期間中の気温は日中でも -10℃くらいあった。ただ、内陸だからか風はあまり強くなく、少なくとも札幌よりは弱い。雪も降っていなかったので、濡れて体温が奪われることもなかった。私の体感では旭岳の方が寒かったので、私は特に問題に感じなかった。雪は何 cm か忘れたが、いつもよりあったらしい。もちろん日本よりは少ない。トラックのところどころにブッシュが見えるが、あまり差し障りなかった。乾雪で軽いのでショートカットしやすいが、雪玉を作るには向いていないだろう。

休養日や競技の後の空いた時間は各々 Tartu の街を散策した。ホテルの近くはショッピングモールが立ち並び、買い物したり食事したりできる。コインランドリーもあったらしい。

「YAKUZA」という寿司、日本料理屋、「CHOPSTICKS」というアジア系料理屋、「Superdry 極度乾燥（しなさい）」という海外で人気のブランド服店など、興味深い名前の店があった。

(文責 岸祥太郎)

4. 競技結果 (抜粋)

女子スプリント

4200 m、出場者 36 名

1. Anna Ulvensoeen	ノルウェー	14:48
2. Daisy Kudre	エストニア	15:18
<u>3. Mariia Petrushko</u>	<u>ロシア</u>	<u>15:21</u>
33. 渡邊志保	日本	25:55
34. 佐野響	日本	31:02
35. 湯上麻貴	日本	44:57
吉岡梨花子	日本	失格

男子スプリント

4900 m、出場者 34 名

1. Sergei Gorlanov	ロシア	14:48
2. Vladislav Kiselev	ロシア	14:51
<u>3. Joergen Haugen Madslie</u>	<u>ノルウェー</u>	<u>14:55</u>
26. 石原湧樹	日本	19:53
30. 石原拓巳	日本	21:31
33. 岸祥太郎	日本	23:38
34. 塩平真士	日本	28:08

スプリントリレー

16 チーム出場

1. Norway - 1	41:56			
Anna Ulvensoeen	06:39	20:20	34:03	
Joergen Haugen Madslien	13:35	28:05	41:56	
2. Russia - 2	42:32			
Marina Viatkina	06:49	21:14	35:21	
Vladislav Kiselev	14:32	28:33	42:32	
3. Russia - 1	43:31			
Mariia Petrushko	06:07	21:14	35:58	
Sergei Gorlanov	13:36	28:40	43:31	
14. Japan - 1	58:48			
渡邊志保	10:10	29:01	49:06	
石原湧樹	19:59	38:12	58:48	
15. Japan - 2	01:07:38			
佐野響	12:09	34:35	58:07	
石原拓巳	24:13	43:21	01:07:38	

女子パシュート

7200 m、出場者 33 名

1. Anna Ulvensoeen	ノルウェー	26:58
2. Daisy Kudre	エストニア	27:40
<u>3. Mariia Petrushko</u>	<u>ロシア</u>	<u>28:07</u>
31. 渡邊志保	日本	53:21
吉岡梨花子	日本	01:08:01
(スプリント失格のため順位付かず)		
32. 湯上麻貴	日本	01:51:36

男子パシュート

10100 m、出場者 34 名

1. Joergen Haugen Madslie	ノルウェー	32:18
2. Jyri Uusitalo	フィンランド	32:50
<u>3. Samuli Schroderus</u>	<u>フィンランド</u>	<u>33:11</u>
23. 石原湧樹	日本	43:07
27. 石原拓巳	日本	48:25
28. 岸祥太郎	日本	57:18
30. 塩平真士	日本	01:09:15

男子ミドル

13300 m、出場者 33 名

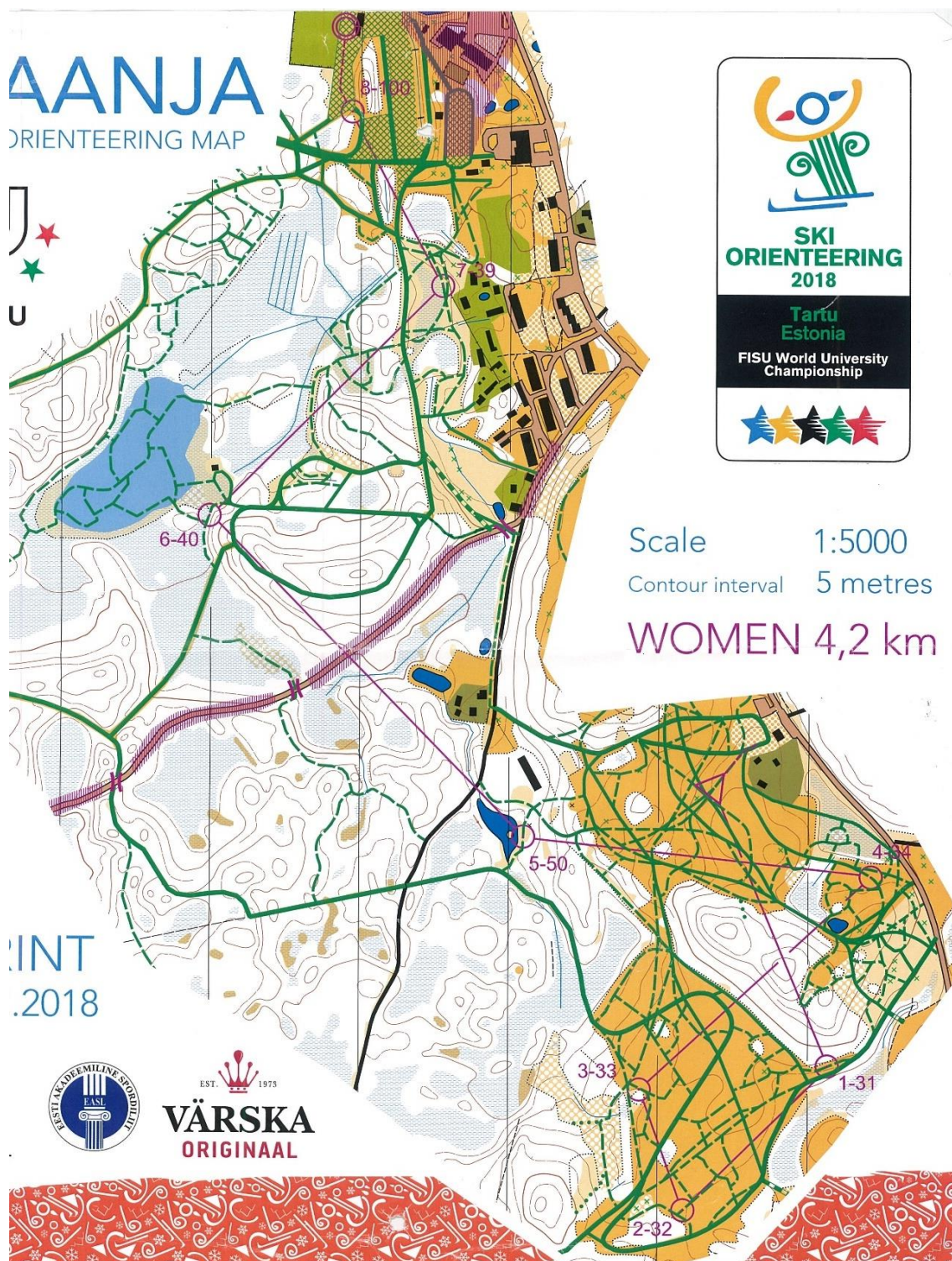
1. Sergei Gorlanov	ロシア	38:24
2. Vladislav Kiselev	ロシア	39:49
<u>3. Sixten Olof Vilhelm Walhe</u>	<u>スウェーデン</u>	<u>39:57</u>
27. 石原湧樹	日本	53:47
28. 石原拓巳	日本	54:24
31. 岸祥太郎	日本	58:33
32. 塩平真士	日本	01:02:37

女子ミドル

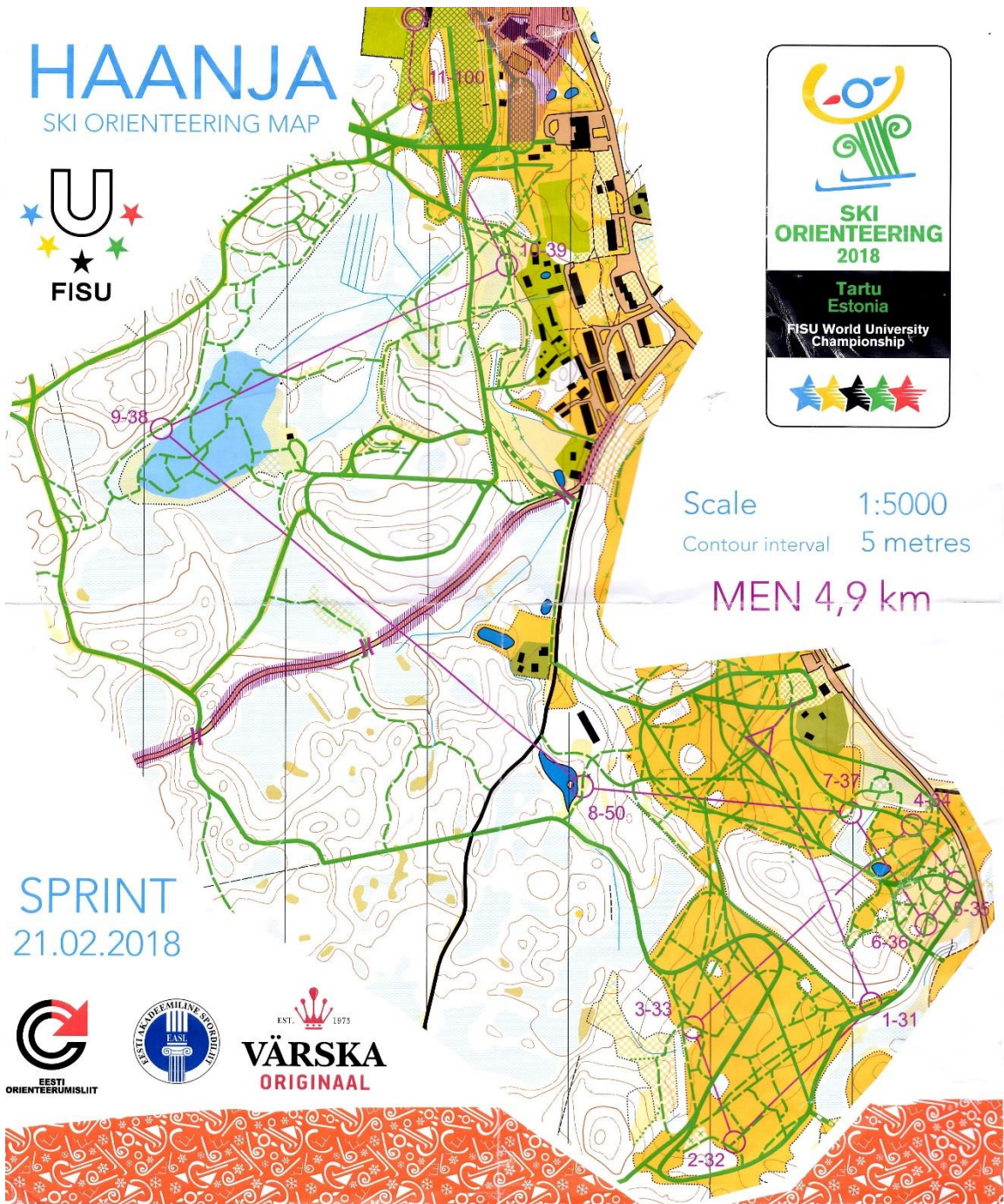
11800m、出場者 34 名

1. Anna Ulvensoen	ノルウェー	43:09
2. Daisy Kudre	エストニア	44:00
<u>3. Mariia Petrushko</u>	<u>ロシア</u>	<u>45:30</u>
32. 渡邊志保	日本	01:09:51
33. 吉岡梨花子	日本	01:24:14
湯上麻貴	日本	失格

5. 地図



女子スプリント



男子スプリント

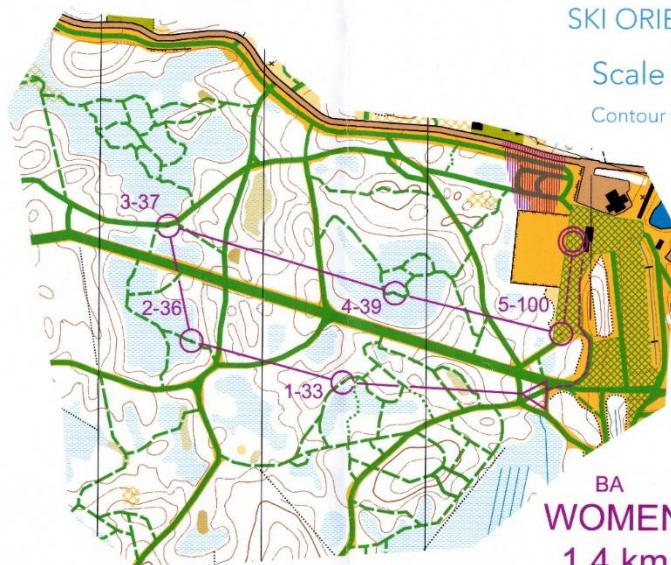


SPRINT
RELAY
22.02.2018

HAANJA

SKI ORIENTEERING MAP

Scale 1:5000
Contour interval 5 metres



BA
WOMEN
1,4 km



スプリントリレー (女子パート)

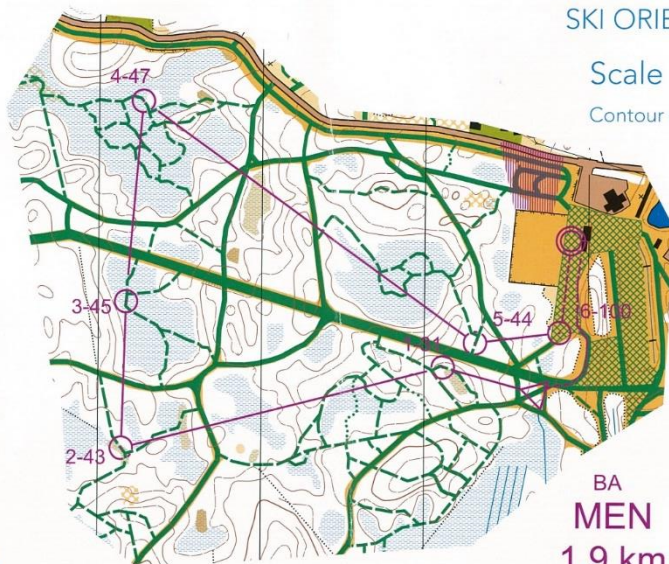


SPRINT
RELAY
22.02.2018

HAANJA

SKI ORIENTEERING MAP

Scale 1:5000
Contour interval 5 metres



BA
MEN
1,9 km



スプリントリレー (男子パート)

HAANJA

SKI ORIENTEERING MAP



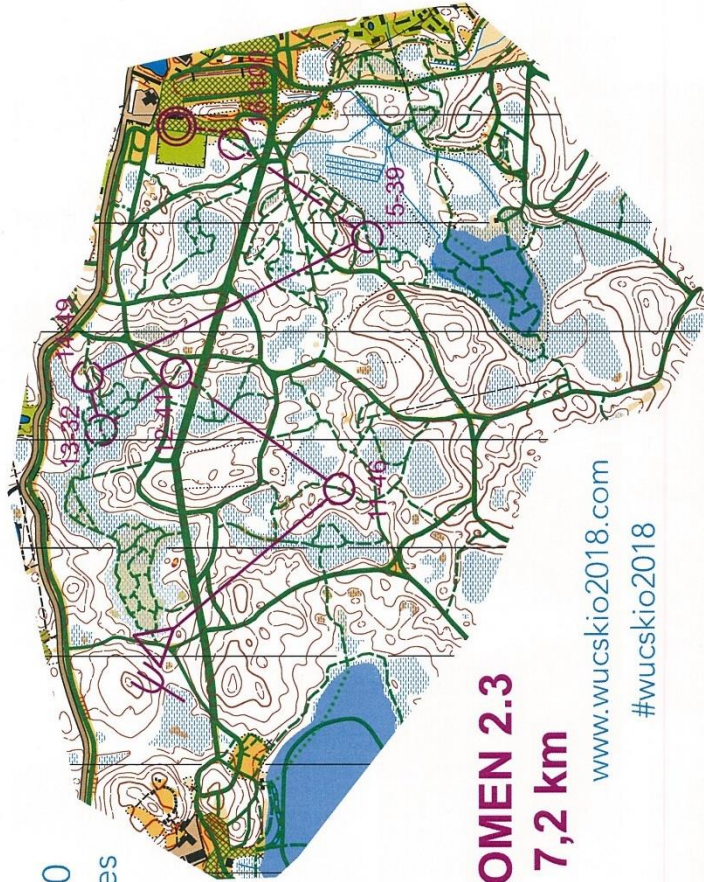
Scale 1:10000
Contour interval 5 metres

PURSUIT
24.02.2018



WOMEN 2.3
7,2 km

www.wucskio2018.com
#wucskio2018



女子パシュート

HAANJA

SKI ORIENTEERING MAP

Scale 1:10000
Contour interval 5 metres

PURSUIT
24.02.2018



MEN 4.3
10,1 km

www.wucskio2018.com
[#wucskio2018](https://twitter.com/wucskio2018)



男子パシュート

HAANJA

SKI ORIENTEERING MAP

Scale 1:10000
Contour interval 5 metres

MIDDLE
25.02.2018



EESTI
ORIENTEERINGUSLIIT



www.wucskio2018.com
#wucskio2018

MEN 4.2
13,3 km



SKI
ORIENTEERING
2018

Tartu
Estonia
FISU World University
Championship



男子ミドル

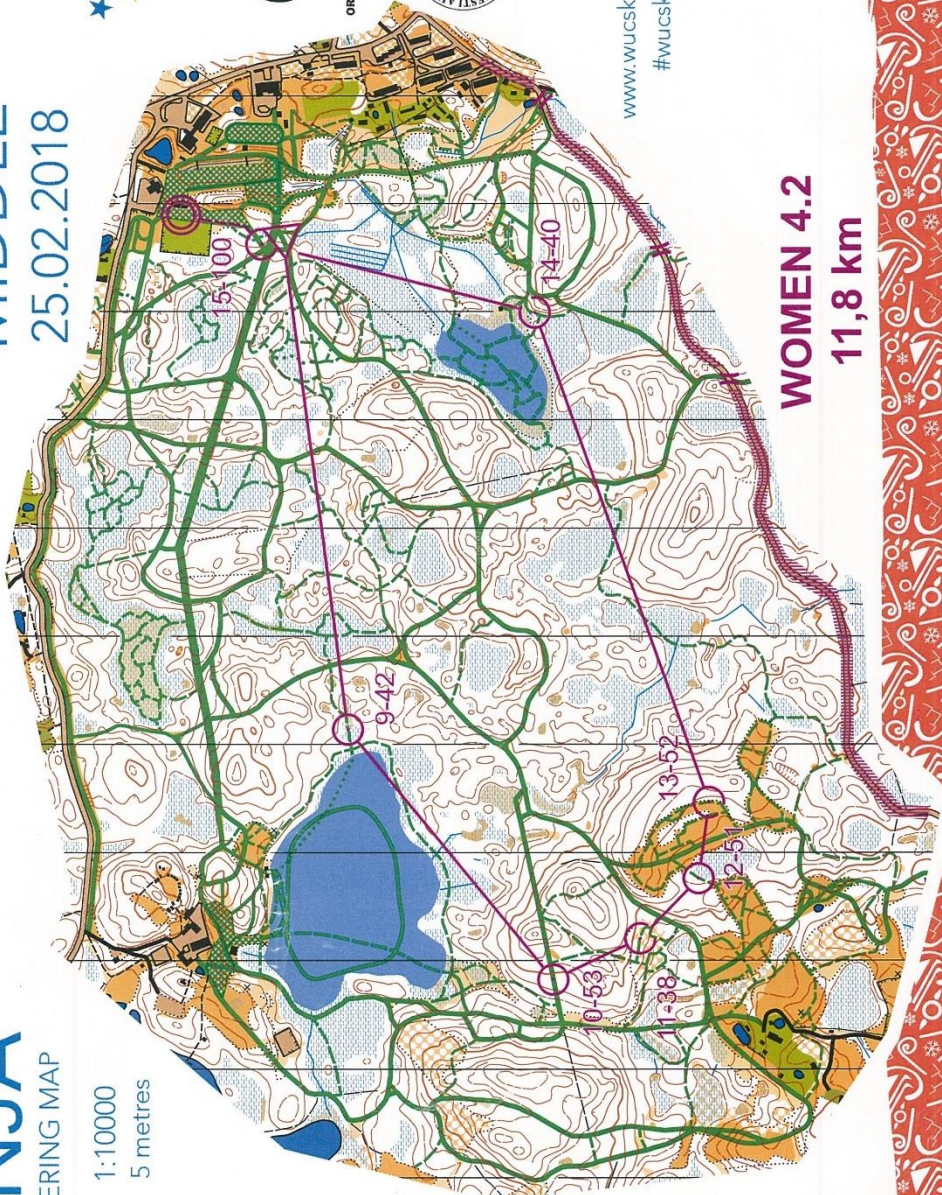
HAANJA

SKI ORIENTEERING MAP

Scale 1:10000

Contour interval 5 metres

MIDDLE
25.02.2018



www.wucskio2018.com

#wucskio2018



WOMEN 4.2
11,8 km



女子ミドル

6. 大会風景



今回の日本チーム 大会会場にて



ホテルのワックスルーム



待機所の様子 各国の選手もリラックスした雰囲気だった



モデイベ中の塩平選手 この後、岸選手と衝突する



スプリントトップスタートの湯上選手 大会トップスタートでもある



スプリントリレーのスタート



スプリントリレー 石原（湧）選手と渡邊選手のチェンジオーバー



パシュート 軽快に滑る石原（湧）選手



ミドル ポストに辿り着いた石原（拓）選手

7. 会計報告

今大会に係る予算報告書は以下の通りである。

支出の部	日本円概算	人数	小計	備考
参加費用	¥63,700	9	¥573,300	(@70 ユーロ×8 泊)
渡航費用	¥1,540,810	1	¥1,540,810	成田～ヘルシンキ～タリン
ワックス等消耗品	¥0	0	¥0	チーム用備品 (別途調達)
FISU 登録費用	¥2,600	8	¥20,800	@20 ユーロ
オフィシャル謝礼	¥0	0	¥0	
ウェア費用	¥0	0	¥0	
雑費	¥3,200	1	¥3,200	荷物の宅配に関わる費用
小計			¥2,138,110	
収入の部				
SKI-O 委員会 負担金	¥67,020	1	¥67,020	オフィシャル参加費用 ／キャンセル費用
助成金	¥800,000	1	¥800,000	スポーツ振興基金による助成金
オフィシャル負担金	¥151,090	1	¥151,090	オフィシャルによる個人負担
以上小計			¥1,018,110	
参加者負担金	¥140,000	8	¥1,120,000	学生による負担予定額
小計			¥2,138,110	

ご寄付して頂いた方々

今回、大変多くの方々からご寄付を賜りました。報告書へのご記名のお許しを頂いた方々のみ、以下に記します（敬称略）。

- | | |
|--------------------|--------|
| ・岩手大学競技スキー部 OBOG 会 | 今井 誠 |
| ・及川 翔太 | 上羽 浩平 |
| ・大里 真理子 | 太田 幸彦 |
| ・岡崎 弘幸 | 大西 諒太 |
| ・荻田 育徳 | 大矢知 開人 |
| ・梶谷 鞠江 | 岡田 吾一 |
| ・北島 咲江 | 岡部 達也 |
| ・黒田 幹朗 | 折原 良明 |
| ・後藤 孔要 | 加藤 顕次郎 |
| ・昆野 郁 | 加藤 成基 |
| ・崎原 悠 | 加納 啓史 |
| ・佐野 晃信 | 神山 俊介 |
| ・スキーオリエンテーリング有志 | 菊本 吉武 |
| ・高橋 大輔、紀子 | 黒澤 秀樹 |
| ・高橋 美和 | 児玉 言子 |
| ・武田 直之 | 後藤 貴之 |
| ・茅野 耕治 | 佐竹 七重 |
| ・中附生物部保護者後援会 | 清水 隆久 |
| ・寺嶋 一樹 | 下野 恵 |
| ・西原 朗、文乃 | 武川 芳久 |
| ・服部 七星 | 谷口 健 |
| ・林 龍之介 | 坪田 隆 |
| ・藤井 範久 | 津室 恵治 |
| ・プルデンシャル生命保険 | 照屋 敦涼 |
| 品川第一支社 有志 | 徳久 大器 |
| 増元 和也 | 根岸 由佳 |
| 安達 和貴 | 祢津 哲平 |
| 安藤 真 | 花崎 俊 |
| 井桁 昭博 | 早川 剛史 |
| 池本 敬邦 | 平川 雄一郎 |
| 石毛 武志 | 堀口 貴大 |
| 市浦 哲 | 松尾 秀幸 |

南 美隆

山崎 陽司

米澤 綱一郎

寄川 太助

湧川 盛洋

渡邊 純

・堀江 守弘

・孫田 三郎

・宮川 俊哉

・山田 航平

・山本 賀彦

・横山 朋弘

・黒岩 和夫

・城下 博夫

・中尾 眞

・野村 純一

・山下 明彦

・居戸 利明

・比留間 進

・野口 信嗣

・打矢 智昭

・永田 俊広

・若林 英紀

・山谷 歩

・蒲地 紀幸

・田中 謙

おわりに 日本チームを支えてくださったみなさまへ

岸祥太郎

私たち日本チームは実に多くの方々から支援していただきました。この場をお借りし、そのご支援の中身をご紹介します。

大会エントリーなどの事務手続きについて、大会前はスキーO委員会委員長である柴田さんが、大会中はオフィシャルの酒井さんが引き受けて下さいました。おかげ様で選手は競技に専念することが出来ました。また、酒井さんには合宿などでご指導をして頂き、選手の技術向上に大いに役立ちました。

夏季の合宿から12月の代表選考会、そして世界選手権直前まで、合宿や大会を運営して下さいだったのが、信原さんや笹田さんほかルスの皆さまです。全ての合宿と大会が、本番のレースに向けた貴重な体験になりました。また、スキー用具の調達といったサポートも、お金の無い学生には大変ありがたかったです。

そして、スキーO関係者の皆さまによる様々な助言やメールを通じての応援メッセージは、どれもが日本チームにとって心強かったです。

エストニアではボランティアの方々にお世話になりました。空港での荷物トラブルへの対処や、ルームキーの紛失への対処など、挙げたら切りがありません。また、海外チームのコーチにもお世話になりました。酒井さんがいないミドルにおいて、スタートでポールを持って頂いたり、薄着をしている私を（半分冗談で）心配して下さいたりしました。

遠征費用のやりくりにつきましては、日本スポーツ振興センターから多額の助成金を頂きました。それでもなお、予算報告書に記されているように参加者負担分が14万円あり、われわれ学生にとっては重い負担になるどころでした。しかし今回はご寄付を募ったところ、多くの方のご厚意によって952000円の寄付金が集まりました。一部は現地から送ったポストカードやその郵送費（計95.5ユーロ、約13000円）に充てさせて頂きましたが、残りは後で参加者負担金の一部の返還に充てられる予定です。おかげで選手たちがいったい何時間分のアルバイトを練習に振り替えることができたかと考えると、感謝してもし切れません。ご寄付をして頂いた方々、本当にありがとうございました。

日本チームを支えて下さった方々に、チーム一同、改めて心からお礼を申し上げます。皆さまに、日本チームをサポートしてよかった、楽しかった、と少しでも感じていただけたなら幸いです。皆様のご支援に報いるためにも、これからもスキーOの更なる発展に尽力していきます。

2018年スキーオリエンテーリング世界学生選手権報告書

発行月 2018年3月

編集者 岸祥太郎